

《恒存「關係論」で讀む、小林秀雄『プラトンの國家』》

まず「前説」をしておきます。

評論『プラトンの國家』文言中、「巨獸・集團・社會」等を、以下式の様に『關係論』に於ける「場(C')」と捉へてみると、別の文言「必然・慾望・力」等を、「巨獸・集團・社會」(場C')から生ずる「關係(D1)」として、捉へる事が可能となる。さうすると、その他の文言についても、以下の様な關聯としての「圖式」に収まるのではなからうかと考へた次第であります。

*「巨獸(C':社會・集團・國家)」⇒「必然・慾望・力(D1)・知識や眞理の尺度(D1)・奉仕屈從(D2)」⇒「何處・善惡・正義不正義・自由・平等差別(F:慾望必然的諸概念)⇒「撫でる・意見・學說(E)」⇒「ソフィスト達・大衆・人間(Δ梓)」。

~~~~~以下文、「」内が小林文。〔 〕( )内は吉野注。~~~~~

P29「(ソクラテスは言ふ)『どんな高德な人(Δ梓)と言はれてゐるものも、恐ろしい、無法な慾望(A&D1)を内に隠し持つてゐる』⇒「さう言ふ人間が集つて集團(C')となれば、それは一匹の巨獸(C')になる」。「小さい集團(C')から大國家(C')に至るまで、争つてそれぞれの正義(F)を主張して(E)互ひに譲る事が出来ない(慾望・必然D1)」⇒「眞理の尺度(D1)は依然として巨獸(C')の手にあるからだ」とはつまり・・・

\*巨獸(C'社會・集團・國家)⇒必然・慾望・力・知識や眞理の尺度(必然D1)・奉仕屈從(D2)⇒F:慾望必然的諸概念(何處・善惡・正義不正義・自由・平等差別他)⇒何處(F)を撫でる(E)・意見・學說(E)⇒人間(Δ梓)。

P30「巨獸(C')の慾望(D1)に添ふ意見(慾望的概念F)は善(F)と呼ばれ(E)、添はぬ意見(慾望的概念F)は惡と呼ばれる(E)⇒「その慾望(D1)そのものの動きは『正不正(F)』とは關係のない巨獸の『必然』(D1)の動き」とはつまり・・・同上「赤文」。

\*「巨獸(C')の慾望(D1)の必然(D1)の運動は難攻不落であり、民衆(C')の集團(C')的な言動(『C'⇒D1的』F)は、事の自然な成り行き(必然D1)と同じ性質(『必然D1的』概念F)のものである以上、正義(F)を教へる(E)程容易な事(似非:Eの至大化)があらうか[即ち小生思ふに、正義(F)は集團(C')が作る必然(慾望D1)に靡く、と言ふ事か]⇒「この種の教育者[即ち、集團(C')⇒必然(慾望D1)⇒正義(『慾望必然D1的』概念F)⇒教育(假面・自己欺瞞:Eの至小化)⇒教育者(Δ梓)]は、必ず成功する(集團C'側に附く教育者は勝ちを収める)」⇒「彼の意見(E)は民衆(集團C')の意見(慾望・必然D1)だからだ」。

\*「もし、ソクラテスが、プロパガンダ(宣傳:E)といふ言葉を知つてゐたら、教育(E)とプロパガンダ(E)の混同は、ソフィスト(自己欺瞞者:Δ梓)にあつては必至のものだと言つたであらう」⇒「言ふまでもなく、ソクラテスは、この世に本當の意味で教育(Eの至大化)といふものがあるとすれば、自己(F)教育(E)しかない[『汝自身を知れ』(Eの至大化)と言ふ事か]、或いはその事に氣づかせるあれこれの道[『アイロニー(反語法・對話法:Eの至大化)』]しかない事を確信してゐた」⇒「事實(F)を見定めず(Eの至小化)にレトリック(修辭:E)に頼るソフィストの習慣は、アテナイの昔から變つてゐない、と彼は言ふだらう」。

\*P34(プラトン曰く)「政治とは巨獸(集團C')を飼ひならす(D2)術だ、それ以上のものではあり得ない」⇒「巨獸(C')には一かけらの精神(D1の至大化)もない[あるのは(D1)力・慾望・必然]といふ明察だけが、有效な飼ひ方(D2の至大化)を教へる」⇒「この點で一步でも譲れば、(巨獸C'に)食はれて了ふであらう」とはつまり・・・《巨獸(集團・社會C')⇒慾望(D1)⇒(F:慾望必然的諸概念)善惡・正義不正義・英雄・自由・平等差別他⇒徹底的に疑ふ・戦ふ精神・對話法(Eの至大化)⇒ソクラテス(Δ梓)⇒飼ひならす(D2の至大化:政治)⇒巨獸(C'集團・社會)》。

【關係】

\*D1(右矢印)・・・「必然・慾望・力」・「知識や眞理の尺度(必然D1)」。

\*D2(左矢印)・・・「奉仕・屈從」。

《主題的文章》

\*P34(プラトン曰く)「政治とは巨獸(集團C')を飼ひならす(D2)術だ、それ以上のものではあり得ない」⇒「巨獸(C')には一かけらの精神(D1の至大化)もない[あるのは(D1)力・慾望・必然]といふ明察だけが、有效な飼ひ方(D2の至大化)を教へる」⇒「この點で一步でも譲れば、(巨獸C'に)食はれて了ふであらう」とはつまり・・・《巨獸(集團・社會C')⇒慾望(D1)⇒(F:慾望必然的諸概念)善惡・正義不正義・英雄・自由・平等差別他⇒「徹底的に疑ふ・戦ふ精神・對話法(Eの至大化)」⇒ソクラテス(Δ梓)⇒飼ひならす(D2の至大化:政治)⇒巨獸(C'集團・社會)》。

場(C'):巨獸(社會・集團・國家)

E型(潜在物Fの裏に實在物D1を際立たせる型・Fの「so called」でD1を見せる)・・・\*「撫でる・意見・學說(E)」。  
\*「教育(E)とプロパガンダ(E)の混同」(Eの至小化)。  
\*「正義(F)を教へる(E)程容易な事(似非:Eの至大化)」。  
\*「徹底的に疑ふ・戦ふ精神」(Eの至大化)。  
\*「本當の意味で教育(Eの至大化)といふものがあるとすれば、自己(F)教育(E)しかない[『汝自身を知れ』(Eの至大化)と言ふ事か]、或いはその事に氣づかせるあれこれの道[『アイロニー(反語法・對話法:Eの至大化)』]しかない」。  
\*「事實(F)を見定めず(Eの至小化)にレトリック(修辭・でつち擧げる:E)に頼る」(P31)。

高德な人・みんな・ソフィスト達・大衆・(Δ梓)・ソクラテス(Δ梓)

F言葉・概念:「何處・善惡・正義不正義・自由・平等差別他」(F:慾望必然的諸概念)